

幼児・児童における共感性の発達

今 井 靖 親

(心理学教室)

(昭和49年4月30日受理)

対人認知の研究領域において、幼児や児童の共感性の発達を扱ったものは数少ないが、子どもが何歳くらいから共感的行動が可能であるかについて、年少児は自己中心的で他人の感情への共感は無理であるという主張と、年少児でもすでに共感性をそなえているという主張とが対立しており、研究者間で一致した見解が得られていないのが現状である。

Burns & Cavey (1959) は3歳から6歳までの子どもに短いストーリーとその場面を描写した刺激図版を呈示し、各図版の主人公の気持を推測的に言わせるという方法を用いて、幼児の共感性を測定しようと試みた。この実験において、3歳から5歳までの年少児の共感性は5歳以上の年長児のそれよりも有意に低いことが見い出されたが、この理由について Burns & Cavey は、年長児になると社会的感受性が高まり、共感的な能力もそなわってくるが、年少児は、まだ自己中心的であるので、一定の状況において他人の感情を認知できない、という説明をおこなっている。Feshbach & Roe (1968) は、6歳と7歳の子どもに基本的情緒の表出場面を叙述したストーリーを聞かせながら、3枚1組の刺激図版を示し、そこに登場する主人公の気持を述べさせた。その結果、彼らは、6、7歳の子どもでも他人の感情状態を認知しようと報告している。Rothenberg (1970) は、Feshbach & Roe (1968) と同様の手続きで、3年生と5年生の共感性を測定し、年齢が進むにつれて共感性は高まるが、その完成期は3年生、5年生の時期ではなく、前青年期にあることを明らかにした。これに対して Borke (1971) は、年齢の低い子どもが他人に対する共感的行動がとれず、自己中心的であるように見えるのは、彼らの反応を測定する方法に問題があると考え、従来の言語で直接答えさせる方法に代わって、予め用意した表情図を選択させる回答方法を採用した。その結果、彼女は3歳程度の年少児でも、彼らなりに他人の感情を理解し、それに反応する能力があることを見出し、7歳くらいまでの幼児は自己中心的であり、他人の立場に立てないとする Piaget, J. の考え方を批判した。わが国では、今井・桶本 (1973) が、Borke (1971) と類似した手続きで、4歳児、5歳児を対象として共感性の発達を研究している。それによると、すでに4歳児にも共感性は見い出され、5歳児では4歳児よりも有意に高い共感性が認められた。Chandler & Greenspan (1972) は、Borke (1971) の手続きにならって、1年生から7年生の子どもを対象に一連のストーリーを聞かせ、その主人公の感情反応を予想させ、これを言語で回答させた。その結果、Chandler & Greenspan は、1年生の子どもでも他人の感情的反応を正しく予想できないことはないが、他者の感情を正しく推測できる能力は、児童中期にならないと完成しないという結論を導き、Borke (1971) の見解を批判した。これに対して Borke (1972) は、ただちに反論をおこなっているが、彼女はさらに中国人とアメリカ人の3歳から6歳の子どもを対象として、共感的能力の発達と社会階層や文化の相違との関連性を考察し、先の研究結果 (Borke, 1971) の正当性を確認した (Borke, 1973)。

以上、従来の研究を簡単に紹介したが、最初に指摘したように、子どもが何歳ぐらいから共感的行動をとれるかについては研究者間に論争があり、一致した見解が得られていない。

ところで、こうした不一致は、主として共感性の測定方法の相違から生じていると考えられる。すなわち、共感性を測定するのに、Burns & Cavey (1957)、Feshbach & Roe (1968)、Rothenberg (1970)、Chandler & Greenspan (1972) らは、被験者の直接的な言語報告にもとづいており、いっぽう、Borke (1971、1973)、今井・楠本 (1973) は、表情図選択という非言語的な測定手段を用いているのである。このように、共感性を測定する方法が、研究者によって異なっているのに、この点を無視して、たとえば幼児・児童の共感性の芽生えや完成の時期について議論をくり返してみても、適切な比較検討がなされたことにはならない。

そこで、本研究は、直接的な言語報告と非言語的回答方法とを比較対照することによって、幼児・児童における共感性の発達の特徴を明らかにする目的でおこなわれた。

方 法

実験計画 2(群；非言語群，言語群)×2(性；男，女)×2(年齢；3歳，小学校1年生)の要因計画である。

被験者 奈良市内の保育園児(平均年齢は3歳9か月)男女各40名ずつ、計80名。同じく奈良市内の小学校1年生(平均年齢は6歳7か月)男女各40名ずつ、計80名、合計160名。

実験材料 (1)“喜び”“悲しみ”“怒り”“恐れ”の4つの基本的情緒場面を叙述した短いストーリー(各情緒ごとに2種類、合計8種類)。(2)上記各ストーリーにおける主人公の行動状況を具体的に描写した3枚連続の刺激図版(合計24枚)。1枚の図版の大きさは25.0cm×35.5cm。(3)マンガ風にアレンジされた6枚の表情図版(A.うれしい時の顔、B.悲しい時の顔、C.おこった時の顔、D.こわい時の顔、E.ふつうにしている時の顔、F.眠っている時の顔)。1枚の表情図の大きさは10cm×10cm。A～Dは上記の4つの情緒に対応させるために準備されたものであるが、EとFは、A～Dが偶然的中する確率を少なくする目的で加えられた。(4)言語群の反応を記録するための簡単な記録用紙。

手続き 被験者は年齢別、男女別に同数ずつ言語群と非言語群とに分けられた。まず、非言語群の被験者には表情図版がランダムに呈示され、次のようにその情緒的意味が問われた。“これは、どんな気持をあらわした顔ですか。どんな気持の時の顔ですか。”もし被験者が表情図の意味を正しく理解できていない場合には、実験者が正しい意味を教え、正しい反応ができるまでくり返し練習をおこなった。こうした手続きを経てから、各被験者に短いストーリーを話して聞かせ、同時にそのストーリーの具体的な場面を描いた3枚1組の刺激図版を呈示した。次にストーリーの例を示しておく。例1.(喜び)①一人の男の子が友だちと遊んでいました。②夕方になって家に帰ると、お父さんが誕生日のプレゼントを買ってきてくれました。③男の子はお父さんからプレゼントをもらいました。例2.(恐れ)①男の子が一人で歩いていると、急に雨が降って来ました。②しばらくすると、雷が鳴り始めました。③そして雷の音はだんだん大きくなって来ました。ストーリーを話しおえると、実験者は被験者に次のような教示を与えた。“このお話の中に出てきた子ども(主人公を指さして)は、このときどんな気持がしたでしょうか。この人はどんな気持になりましたか。この人の気持をいちばんよく表わしている顔は、この中(被験者の前に置かれた6枚の表情図を指さして)のどれでしょうか。1つだけ指さしてください。”他のス

トリーと刺激図版についても、上記の手続きをくり返し、被験者の反応を記録した。

言語群の被験者に対しては、まず初めに非言語群と同じくランダムに1組のストーリーとそのストーリーの具体的場面を描写した3枚1組の刺激図版を呈示し、次のような教示を与えた。“このお話の中に出てきた子ども（主人公を指さして）は、このときどんな気持がしたでしょうか。この人はどんな気持ちになりましたか、言ってください。”このように合計8組のストーリーとその刺激図版を順次呈示し、被験者の回答を記録した。なお、被験者の回答に対しては、実験者はすべて“はい”と応答した。

採点方法 非言語群の被験者が正しく表情図版を選択した場合には1点を与え、不適切な選択をおこなった場合には0点とした。また、言語群の被験者に対しては、その回答が刺激図版の主人公の感情を的確にとらえた表現であると判断された場合には1点を与え、誤った回答や、ストーリーの部分的くり返し、意味不明の表現には0点を与えた。たとえば、恐れ的情绪場面を叙述したストーリーに対する反応の中で、“こわい”とか“びっくりしている”という回答には1点を与え、“雷が泣かそうとした”とか“雨が降って来た”“冷たい”という回答には0点を与えた。

結 果

表1は、年齢別に被験者の平均得点と標準偏差とを示したものである。また、表2は男女別の平均点と標準偏差を示したものである。さらに表3は群別・年齢別の平均得点と標準偏差とを示したものである。

表1 年齢別平均得点と標準偏差

年 齢	喜 び		悲 し み		恐 れ		怒 り	
	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD
3 歳	0.85	0.84	0.41	0.59	0.69	0.71	0.54	0.63
1 年 生	1.64	0.51	1.19	0.71	1.55	0.63	0.40	0.55

表2 性別平均得点と標準偏差

性	喜 び		悲 し み		恐 れ		怒 り	
	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD
男	1.35	0.79	0.80	0.77	1.21	0.83	0.53	0.67
女	1.14	0.90	0.80	0.75	1.03	0.75	0.41	0.59

表3 群別・年齢別平均得点と標準偏差

年 齢	群	非 言 語 群		言 語 群	
		\bar{X}	SD	\bar{X}	SD
3 歳		3.48	1.38	1.50	1.53
1 年 生		5.30	1.10	4.25	1.68

上の結果にもとづいて、2(年齢; 3歳, 1年生) × 2(性; 男子, 女子) × 2(群; 非言語群, 言語群) の分散分析をおこなったところ、表4に示したように、年齢と群の主効果が0.1%水準で、また性の主効果が5%水準でそれぞれ有意となった(それぞれ $F=102.78$; $df=1$ と152, $F=44.93$; $df=1$ と152, $F=5.16$; $df=1$ と152)。

表4 総得点に基づく分散分析表

Source	SS	df	MS	F
年 齢	209.30	1	209.30	102.78***
性	10.50	1	10.50	5.16 *
群	91.50	1	91.50	44.93***
年 齢 × 性	2.76	1	2.76	—
年 齢 × 群	8.56	1	8.56	4.20 *
性 × 群	7.66	1	7.66	3.76(*)
年 齢 × 性 × 群	1.44	1	1.44	—
error	309.55	152	2.04	
Total	641.24	159		

(*) $P<.10$, * $P<.05$, *** $P<.001$

年齢と群との交互作用が5%水準で有意となったので、単純効果の検定をおこなったところ、3歳児、1年生のいずれも0.1%水準で、言語群よりも非言語群のほうが有意に高い得点を示した(それぞれ $t=6.19$; $df=152$, $t=3.29$; $df=152$)。それを図に表わしたものが図1である。性と群の交互作用は、 $F=3.76$, $df=1$ と152, $P<.10$ で、わずかに有意水準に達しなかったが、単純効果の検定を試みたところ、図2に示したように、非言語群では性差は認められなかったが、言語群において男子の得点が女子のそれよりも、0.1%水準で有意に高かった($t=2.98$, $df=152$)。

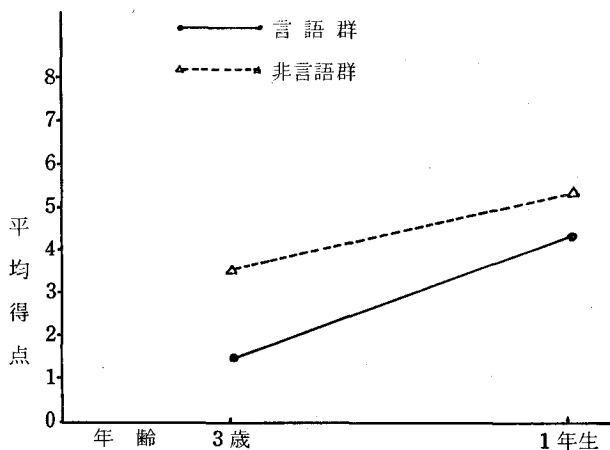


図1 群別・年齢別平均得点

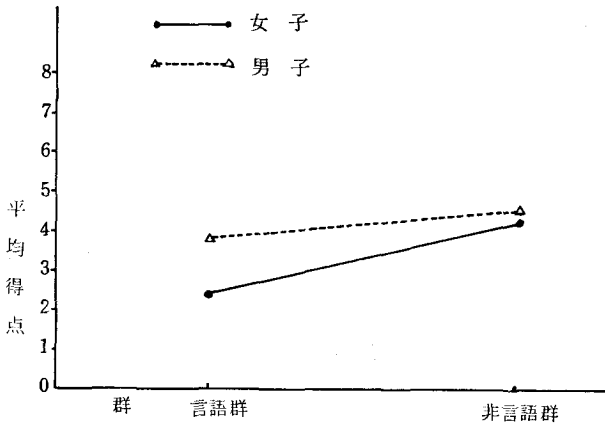


図2 群別・性別平均得点

情緒場面によって、共感の容易なもの共感の困難なものがあるかどうかを検討するために、非言語群、言語群における全被験者の各情緒場面に対する正答率を調べてみた。まず、非言語群においては、3歳児は“喜び”に62.5%、“怒り”に40.0%、“悲しみ”に36.3%、“恐れ”に35.0%の者が適正な反応を示し、これらの人数比には1%水準で有意差が見い出された ($\chi^2=15.29$, $df=3$)。また1年生では、“喜び”に96.3%、“悲しみ”に77.5%、“恐れ”に76.3%、“怒り”に15%の者が適正反応を示し、これらの人数比には0.1%水準で有意差が認められた ($\chi^2=134.27$, $df=3$)。次に、言語群においては、3歳児は“恐れ”に33.8%、“喜び”に22.5%、“怒り”に13.8%、“悲しみ”に6.3%の者が正答し、その人数比には0.1%水準で有意差が見い出された ($\chi^2=12.73$, $df=3$)。また、1年生では、“恐れ”に80.0%、“喜び”に76.5%、“悲しみ”に53.7%、“怒り”に26.3%の者が正しい反応を示し、その人数比には、0.1%水準で有意差が認められた ($\chi^2=52.03$, $df=3$)。

考 察

本研究の目的は、2種の測定方法を用いて3歳児と小学校1年生における共感性の発達の特徴を検討することであった。おもな結果は次のとおりである。(1)非言語群の得点は、言語群の得点よりも高かった。(2)非言語群においても、言語群においても、3歳児よりも小学校1年生のほうが高い共感性を示した。(3)非言語群においては、共感性に男女差は認められなかったが、言語群においては、女子よりも男子のほうが高い共感性を示した。(4)非言語群、言語群とも、“喜び”の情緒に対する共感、“怒り”あるいは“悲しみ”に対する共感よりも正答率が高かった。これらの結果にもとづいて、以下に若干の考察をおこなうことにする。

非言語群の得点は、言語群のそれよりも有意に高かったが、表3から明らかなように、非言語群においては、3歳児でも、8点満点のうち、平均3.48点をとっており、これは3歳児の約44%の者が、他人の感情に正しく共感できたことを意味している。これらのことから、Borke (1971)も指摘しているように、3歳くらいの幼児でも、すでに、ある程度、他人の考えや立場に共感的に反応しうる能力をそなえており、方法さえ工夫すれば、年少児についても共感性の測定が可能である、と結論づけられるのではなからうか。なお、これと関連して、星野 (1969) が、表情の

感情的意味理解に関する発達の研究において指摘しているように、幼児期は方法上の差異によって成績に影響を受けやすいが、児童後期以後になれば、言語能力も高まるので、測定方法上の差異が、成績に大きな変動を与えることはないと思われる。この点を確かめるためには、被験者の年齢の幅を広げて、詳細に検討することが必要である。

本研究において、年少児よりも年長児のほうに高い共感性が認められたことは、Burns & Cavey (1957)、Rothenberg (1970)、Borke (1971, 1973)、今井・桶本 (1973) などの研究結果と一致している。一般に、3歳児に比べて、小学校1年生のほうが、はるかに認知や情緒面の発達が進んでいることを考慮するなら、このような結果は、むしろ当然と言えよう。ただし、すでに述べたように、非言語群において、“怒り”の情緒に対する反応をみると、3歳児の成績よりも1年生の成績のほうが低くなっている。これは、彼らの共感的な能力そのものよりも、今井・桶本が指摘したように、“怒り”という情緒の複雑な性質から生じた結果であると考えられる。

従来の研究をみると、共感性における性差の有無については、必ずしも一致した結果が得られていない。たとえば、Feshbach & Roe (1968)、Rothenberg (1970)、Borke (1971) の研究では、性差は見い出されていないが、Dimtrovsky (1964)、Borke (1973) は、男子より女子のほうが高い共感性を示したことを報告している。本研究では、言語群において、男子のほうが女子よりも高い共感性を示した。Borke (1973) は、被験者の家庭における親の態度や生活習慣の相違が、共感性における性差に影響を及ぼすと考えているが、本研究では、刺激図版8種類中、6種類まで、主人公が男児であったので、これが男子の被験児に比較的共感しやすい条件を与えたのかもしれない。この点に関して、今後、刺激図版の主人公の性と被験者の性との関連を、さらに厳密に検討すべきであると考えられる。

“喜び”の情緒が比較的共感されやすいのに対して、“怒り”あるいは“悲しみ”の情緒が比較的共感されにくい傾向があるという本研究の結果は、Feshbach & Roe (1968) や Borke (1971)、今井・桶本 (1973) の研究結果とほぼ一致している。この理由に関して、Feshbach & Roe (1968) は、他の情緒よりも、“喜び”(happy)のほうが共感されやすいのは、恐らく、“喜び”の経験が“報酬”として与えられるのに対し、他の情緒は不快なものであり、一般に回避されやすい性質をそなえていることからくるのではないかと解釈している。また、Borke (1971) は、“怒り”と“悲しみ”についての共感性が低かったのは、情緒場面を叙述しているストーリーがあいまいであったために、呈示された状況に対して、被験者が適正な反応をしにくかったのではないかと推測している。また、今井・桶本 (1973) は、いわゆる不快情緒である“悲しみ”や“怒り”の情緒は、元来、快情緒の“喜び”などとは異なり、生理学的にも、心理学的にも複雑な側面をそなえていて、この2つを明確に区分することは困難ではないかと述べている。このように種々の説明がなされているとはいえ、比較的共感の容易な情緒と、反対に比較的共感の困難な情緒とが存在することは、測定方法の相違にもかかわらず、多くの研究者が一致して指摘している注目すべき事実である。

要 約

本研究の目的は、2種の測定方法を用いて、幼児・児童における共感性の発達の特徴を検討することであった。

80名の幼児(平均年齢は3歳9か月)と80名の児童(平均年齢は6歳7か月)が、言語群と非

言語群の2群に分けられた。

非言語群の被験者は、まず“喜び”、“悲しみ”、“恐れ”、“怒り”、“ふつう”、“眠っている”の情緒的反応を描写した6枚の表情図を見せられ、それらの情緒的意味を述べるように求められた。もしも、被験者が答えにくいような表情図があったら、実験者がその情緒的意味を教えた。次に、被験者は、ほかの子が“喜び”、“悲しみ”、“恐れ”、“怒り”を感じるかもしれないような短いストーリーを聞かされた。それと同時に、物語内容を描写した絵が、子どもの顔を白ぬきにして示された。各ストーリーを話し終ると、実験者は、そのストーリーの中の主人公の気持ちを最もよく表わしていると思われる表情図を被験者に選ばせた。

言語群の子どもに対しては、まず初めに非言語群と同じストーリーが話され、同じ絵が呈示された。各ストーリーの呈示後、実験者は被験者に物語りの主人公の気持ちを述べるように求めた。

被験者の正しい回答に対しては1点が与えられた。各情緒について2組のストーリーが用意されたので、4つの情緒についての合計点は0点から8点までの範囲であった。

おもな結果は次のとおりであった。

(1) 非言語群の得点は言語群の得点より有意に高かった ($P < .001$)。そして、非言語群における3歳児の44%はストーリーに対して正しい反応をした。このことから、3歳くらいの年少児がすべて自己中心的であるとは考えられず、他人の考えや立場に共感的に反応する能力を持っていると結論できるように思われる。

(2) 年長の被験者(6歳児)の得点は、年少児(3歳児)のそれよりも有意に高かった。

(3) 非言語群においては性差は認められなかったが、言語群においては、男子の得点は、女子の得点よりも有意に高かった。

(4) 他人の“喜び”の情緒に対する共感的反応は、すでに3歳で確立されているように思われるが、“悲しみ”、“怒り”の反応を認知することは、年少の子どもには、困難であるように思われる。

〈付記〉 本研究の実験を快くおひき受けくださった奈良市佐保山保育園、極楽坊保育園、みのり保育園、大安寺小学校の先生方、ならびに、資料の蒐集と整理にご協力くださった中島淳子さんに厚く感謝します。

引用文献

- Borke, H., 1971 Interpersonal perception of young children: Egocentrism or empathy? *Developmental Psychology*, 5, 2, 263—269.
- Borke, H., 1972 Chandler & Greenspan's 'ersatz egocentrism': A rejoinder. *Developmental Psychology*, 7, 107—109.
- Borke, H., 1973 The development of empathy in Chinese and American children between three and six year of age: A cross-cultural study. *Developmental Psychology*, July, 102—108.
- Burns, N., & Cavy, L., 1957 Age differences in empathic ability among children. *Canadian Journal of Psychology*, 11, 227—230.
- Chandler, M. J. & Greenspan, S., 1972 Ersatz egocentrism: A reply to H. Borke. *Developmental Psychology*, 7, 104—106.
- Dimtrovsky, L., 1964 The ability to identify the emotion meanings of vocal expressions at successive age levels. In J. R. Davitz (Ed.), *The communication of emotion meaning*. New York:

McGraw-Hill 69—86.

Feshbach, N. D., & Roe, K., 1968 Empathy in six and seven year olds. *Child Developm.*, 39, 133—145.

星野喜久三, 1969 表情の感情的意味理解に関する発達の研究, 教育心理学研究, 第17巻, 第2号, 90—101.

今井靖親・桶本真也, 1973 幼児の共感性に関する実験的研究, 奈良教育大学紀要, 第22巻, 第1号, 185—193.

Rothenberg, B. B., 1970 Children's social sensitivity and the relationship to interpersonal competence, intrapersonal comfort, and intellectual level. *Developmental Psychology*, 2, 335—350.

THE DEVELOPMENT OF EMPATHY IN YOUNG CHILDREN

Yasuchika Imai

Department of Psychology, Nara University of Education, Nara, Japan

(Received April 30, 1974)

The purpose of the present study was to examine the developmental characteristics of empathy in young children, using two assessment techniques. 80 infants (mean age of 3 yr. 9 mo.) and 80 children (mean age of 6 yr. 7 mo.) were divided into two groups: a verbal group and a nonverbal group.

Ss in nonverbal group were first shown drawings of six faces depicting the emotional responses of "happy", "sad", "afraid", "angry", "normal", and "sleeping", and were asked to identify them. If *S* had any difficulty recognizing the drawings, the examiner identified the emotion for him. He was then told short stories in which another youngster might easily be received as feeling happy, sad, afraid, or angry. Each story was accompanied by a picture of a child with a blank face engaged in the described activity. Following the presentation of each story, the examiner asked *S* to select the face that best showed how the central figure in the story felt.

Ss in verbal group were first told the same stories and were shown the same pictures. After the presentation of each story, the examiner asked the subject to state how he felt about the emotional reaction of the central figure.

The subjects received a score of 1 for each specific matching. And the total empathy score, over four affects, could range from 0 to 8, since there were two sequences for each affect.

The main results obtained were as follows:

(1) The mean empathy score for nonverbal group was significantly greater ($P < .001$) than the score for verbal group, and 44% of the 3-year old children in the nonverbal group gave the correct responses to the stories. It seemed reasonable to conclude, therefore, that young children as 3 years of age are not totally egocentric but have some capacity for responding empathically to another person's perspective and point of view.

(2) The number of empathic responses given by older subjects (ages 6) was significantly higher than the number of that of younger subjects (ages 3).

(3) Although no sex differences were observed in the nonverbal group, the empathy scores of boys were significantly greater than those of girls in the verbal group.

(4) While empathic responses to feelings of happy reactions in other people appear to be well established as early as 3 years of age, recognition of sadness or anger reactions in other people seemed to be very difficult for the young children.